

エッセイ

骨髓採取検体の運搬

骨髓採取検体の運搬にご協力いただいた大阪市立大学医学部附属病院中央臨床検査部の片上伴子さん、高橋喜代子さん、今井重良さん、藤坂友子さん、奥井靖子さん、湯村暁さん、に深謝いたします。

血液内科・造血細胞移植科一同

はじめに

非血縁者間骨髓移植は年々増加しており、2008年1月末までに9038例、また骨髓移植を待っておられる患者さんは2381名、ドナー登録者は301768名となっています。図1に非血縁者間骨髓移植実施数の年度別グラフを掲載します。

非血縁者間骨髓移植実施数

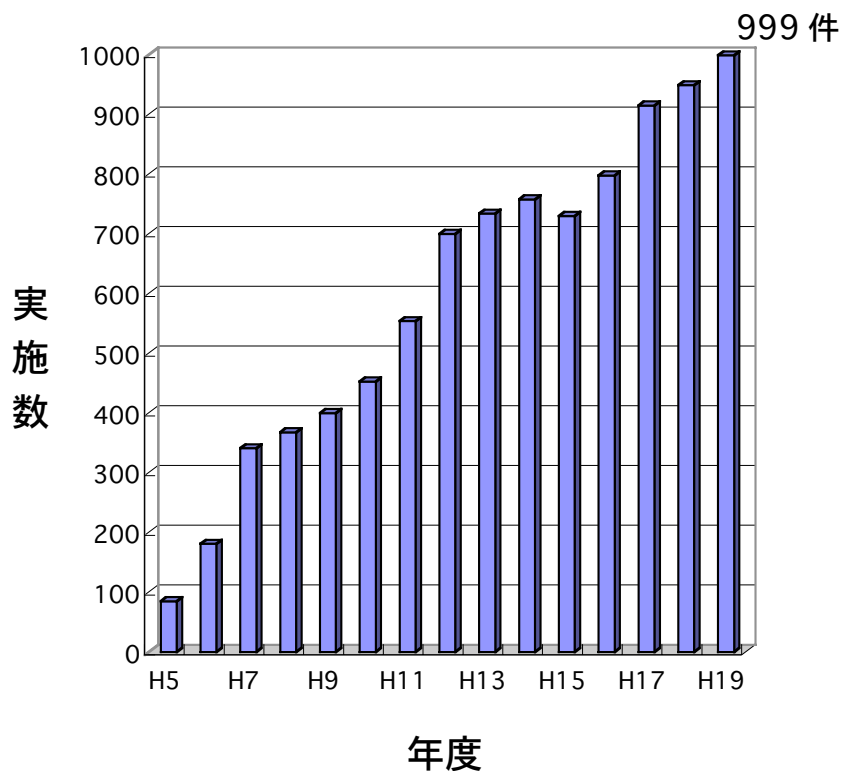


図1 非血縁者間骨髓移植実施数の推移

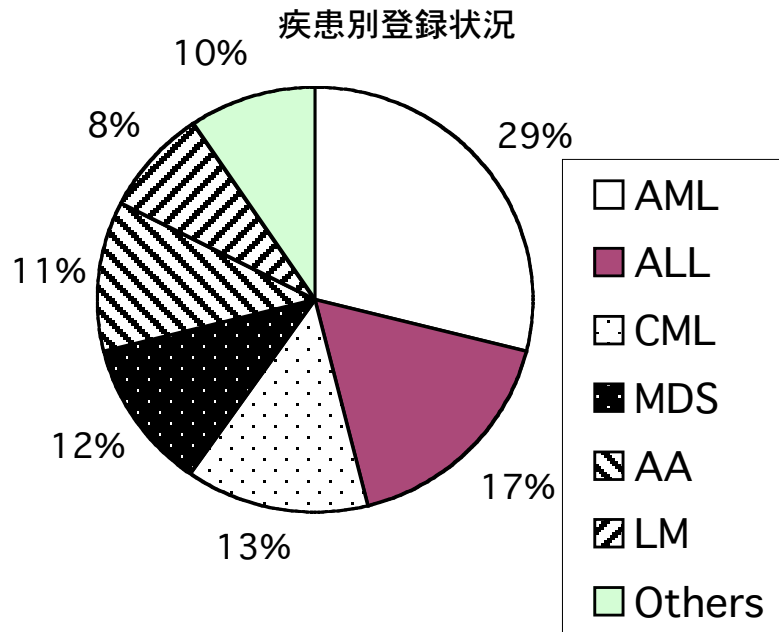


図2 疾患別登録状況

AML : acute myelogenous leukemia、急性骨髄性白血病

ALL : acute lymphogenous leukemia、急性リンパ性白血病

CML : chronic myelogenous leukemia、慢性骨髄性白血病

MDS : myelodysplastic syndrome、骨髄異形成症候群

AA : aplastic anemia、再生不良性貧血

LM : lymphoid malignancy、悪性リンパ腫を含むリンパ系悪性腫瘍

Others : その他の疾患

*海外登録者を含む

図2は現在、移植を待っておられる患者さんの疾患別グラフです。傾向としてはグリベックという画期的な薬剤が開発され、慢性骨髄性白血病患者さんの登録数が減少、骨髄非破壊的移植法が開発され高齢者に対する移植が可能になった事より高齢者に多く発症する骨髄異形成症候群患者さんの登録数が増加しております。

非血縁者間骨髄移植までの過程は患者の骨髄バンク登録→HLA 検索開始→結果が主治医に届き、移植可能症例の5名選定→確認検査開始→確認検査結果が主治医に届き、条件が満たされれば選定→最終同意確認→各地区事務局での採取施設交渉（ドナーの希望時期を最優先）→採取施設決定→採取施設におけるドナー健康診断→採取最終決定→骨髄採取となります（最終同意から骨髄採取までは6ヵ月以内に施行されます）。

骨髄採取後の採取検体運搬は移植施設に任されます。当院では当初、当院常勤医

師がその運搬の役目を担っておりましたが、移植症例が増加するに従い、日程調整が困難となって参りました。そこで病院長ならびに中央臨床検査部部長の許可のもと、検査部で血液検査に携わっている技師の皆様をお願いして骨髄採取検体の運搬を2006年より行っていただいております。

今回、その骨髄採取検体運搬について大変苦勞されている様子を中央臨床検査部の片上伴子さんにエッセイとして2編書いていただきました。ここからは肩の力を抜いて読んでいただければ幸いです。もしかすると連載化するかもしれません……。

なお、文中の地名および年月日につきましては詳記していませんことをご了承ください。

大阪市立大学医学部附属病院血液内科・造血細胞移植科

山根孝久

骨髄採取検体運搬記 1 "雪国周遊"旅

大阪市立大学医学部附属病院中央臨床検査部

片上伴子

これは、初めて私が骨髄採取検体を受け取りに行ったときのでき事です。骨髄採取検体を提供して下さったのは北海道の方でした。

さすがに当日大阪発では間に合わないため、前日、朝から北海道に向かうことにした。私の乗った飛行機は順調に昼前、新千歳空港の上空に到達したが、強風のため管制塔から着陸許可が下りず、新千歳上空を旋回すること1時間余り。ついに燃料不足のため、やむなく帯広空港に着陸。それが難行苦行の始まりとなった。乗客のほとんどが札幌周辺へのスキー客や観光客のグループ。かたや骨髄採取検体運搬用のケースを提げた、たった一人の私。

帯広から骨髄採取施設に向かうには、富良野経由のバス路線もあるが……、いやいやバスは危ない！いつ立ち往生するかわからないため、安全策をとって、千歳回りで目的地に向かうことに。ただし、同じ飛行機に乗っていた大勢の乗客と一緒にいるので、バスにしろ、列車にしろ、先を争って列に並ばないと乗り損なう。そのためとっくにお昼は過ぎているのに弁当さえ買いに走れない。他の人達は仲間うち

で手分けして、買ってきたお弁当をばくついているというのに。積雪で大混乱の JR 千歳駅では駅員さんも大混乱。〇〇行き列車の到着ホームがアナウンスのたびに異なる。その度にホームをあっち行ったりこっち行ったり。でも北海道の人は偉い！決して動じない、怒らない。うーん、大阪人とは大違い。

やっと、採取施設のある駅に着き、駅上のホテルにチェックインした時、時計の針は 20 時をゆうに回っていた。今朝、阿倍野から空港バスに乗ったのが 8 時。さてさて気を取り直して、今日の 2 度目の「食事だあー！」と意気込んだのにホテルのレストランも駅前の飲食店ももう営業を終了したとの事。うーん、大阪とは大違い。あーあ、この日の晚餐は名物料理を食べることなく、雪の降りしきるなか調達してきたコンビニ弁当と相成り候。

翌朝、晴天。でも昨日の二の舞になってはならじと、早々と採取施設に向かう。指示された医局に行くと、秘書さんが「まだ少し時間がありますね。この辺りだと〇〇がお薦めですけど、ちょっと時間がねえ・・・」と。いえいえ、私にはそんな精神的余裕はありませんです。時間待ちの間に、病院内を見学するとしよう。やっぱり気になるのは検査室や採血室。設備は最新とは言えないけれど、細かい所にまで注意の行き届いているのがよくわかる。

医局に戻ると、ほぼ予定時刻ぴったりに執刀医が採取したばかりの骨髄採取検体を抱えて足早にやってくる。本当に感謝の気持ちでいっぱいになる一瞬である。

「ドナーさん、ありがとうございます！先生、ありがとうございます！皆さん、ありがとうございます！」

帰りは昨日のトラブルが嘘のよう。ただ、新千歳空港では重要なことがひとつある。搭乗手続の際、骨髄採取検体を持参していることを空港職員に告げること。細胞分裂の盛んな骨髄採取検体を被爆から守るため、空港の持ち物検査のための X 線を通してはいけないのだ。空港の方は、運搬ケースの X 線回避と、私の座席の隣にもうひとつの席の確保、とをてきぱきと手配してくれる。この空港職員の対応から、骨髄採取検体の運搬が稀なことではないのだ、ということを実感させられる。

伊丹から当病院に辿り着き、主治医に骨髄採取検体を無事手渡し、見上げた詰所の時計の針は 20 時を指していた。これから夜を徹して、骨髄採取検体の点滴がされるのでしょ。かくして 2 日間にわたる苦闘の初体験は、無事終わったのでありました。

その後も、現在まで日本中の津々浦々から骨髄採取検体を戴いております。この北海道に始まり、南は沖縄まで。全国のドナーの皆様、本当にありがとうございます。そして、移植を受けられた患者さん、これから受けようとしておられる患者さん、どうかどうか、がんばってください。私達もがんばります。

骨髄採取検体運搬記 2 "とほほ"旅

大阪市立大学医学部附属病院中央臨床検査部

片上伴子

新潟行き。かれこれ 1 ヶ月ほど前に、血液内科より依頼が入る。新潟へは過去 2 回出向いている私は、「そこなら私、行こうか。もう目をつむっていても行けるで一！」と豪語してしまったのです。それが、"とほほ"の序章になるとは。

採取月に入り「南の海上に台風発生」というニュースあり。2、3 日して、大阪はそれそうだと分かり、台風の事は完全に忘却の彼方へ。テレビでは盛んに台風情報を流しているが「東京が関わる時だけ首都圏では、首都圏では、って大騒ぎして、それなら沖縄はどうなるの！」と思っていたら、同じく東京の病院へ前日に行ってくれる同僚の今井君が「台風、どうですかねー」と少し不安げに言う。慌ててネットで調べると、関東から東北、北海道が台風の進路ですって！

"とほほ"

でも、日本へ上陸したらきっとスピードを速めるだろう。ドンマイ、ドンマイ。採取 2 日前の時点では「新潟よりも明日の東京の方がやばいなあ」と私達の大方の予想。前日夕刻、予定時刻より少し遅れて今井君、無事東京より帰る。帰りの新幹線が静岡辺りから徐行したとのこと、なにはともあれ「よかった、よかった！」。関東を今晚中に通り過ぎてくれたら、明日の昼は台風一過の爽やかな新潟、となる筈。

新潟行き当日。午前 5 時 30 分に起床、まずインターネットで台風情報と飛行機の運航情報をチェックする。なんと、なんと、台風はまだ関東の上空をすっぽり覆っており、私の今日の行動にきっちり照準を合わせたかのように進んでいるではないか！

"とほほ"

羽田空港は午前の便は全て欠航だが、伊丹発新潟行きは全便運航予定となっている。でも、空港でどうなるか予測がつかないため、余裕を持って 7 時前の南海電車に乗る。

伊丹に着くと・・・不安は的中！電光掲示板のテロップが新潟行きの私が乗る便（8 時 55 分発）と次の便の欠航を知らせている。

"とほほ"

空港職員に「新潟行きの次の便は？」と尋ねていると、傍にいた若い女性に「私も新潟へ行くんです」と声を掛けられる。彼女の情報では台風は今、会津若松で暴れているらしい。それならもう少しの辛抱だ。切符を変更する人達でゴった返すなか、2 人とも 12 時 15 分発の切符を手に入れ安堵。「では、またね」と、彼女とひとまず別れる。（ひとまず、のつもりだったのに一）

さてさて、急にポツカリと 2 時間の空白が。まずは骨髄採取担当の C 先生に電話を入れ、事情を説明、遅れるけれども必ず伺うことを伝える。C 先生も、「それならこちらも予定通り採取に掛かりますから！」と快諾を頂く。外来診察中の山根先生にも、その旨伝えておく。

一段落したら、急にお腹が空いてきた。そういえば朝から飲まず食わず。離着陸する飛行機を眺めながらゆったりとモーニングを食べる。大阪はこんなに晴天なのに・・・。日本も広いなあ、とつくづく感じ入る。結果的には今回の新潟行きで唯一の優雅な時間と食事であった。朝食を終えても、まだたっぷり時間はある。こんな時こそ、めったに覗かない伊丹空港の売店で時間を潰そう。そう、そう、新潟も 3 度目だし、C 先生に大阪名物を土産にしよう。本当はたこ焼きを買いたいけれど、お土産用のたこ焼きって美味しいのかなー？まずかったら、大阪人の沽券にかかわる。さんざん迷った挙句、大阪ならぬ某所名物の〇〇にする（さてなんでしょう？）。

時計を覗いて、やっと 10 時半か、と思っていたらアナウンスが流れている。ウム？ニイガタ？なんと、先ほど予約したばかりの 12 時 15 分の便、更に次の便までもが欠航になった、とのこと。

"とほほ"

またまた慌てて受付へ走る。「なんとしてでも今日中に新潟へ行かないと駄目なんです！」。「申し訳ございません」と綺麗なお姉様が、本当に申し訳なさそうな顔で

言ってくれるが、きっと心の中では「相手が台風なんやから仕方ないでしょ」と思っていることだろう。

結局、現時点で ANA で唯一残っている（日帰りできそうな）15 時 20 分発の便を予約するが、これも出発の 1 時間前にならないと、飛ぶかどうか分からないとのこと。ここまできて、さすがの私も本気で慌て出した。あの長い通路を渡って JAL コーナーへ。ここは、ANA 以上にはっきりしていた。「申し訳ございませんが、新潟行きは本日全便欠航となっております」と ANA に負けず劣らず綺麗なお姉様に、にこやかにではあるがピシャリと言われてしまった。

"とほほ"

「あかーん」、腹をくくって、別の方法を考えなければ！今（11 時過ぎ）なら、東京経由上越新幹線利用でギリギリ間に合うだろう。未練を断ち切り、空港バスで新大阪に向かっていると、山根先生から連絡が入る。「片上さん、今やったら、『とき』（上越新幹線の列車名）間に合うよ！」と、さっき綺麗なお姉様に調べて貰ったのと同じ列車時刻を教えてくれる。先生も外来の診察で忙しいのに、すみませんです。

新大阪駅で、駅員さんに『とき』が翔んで…、いや、動いていることを確認。12 時発の『のぞみ』の指定席は満席。

階段を駆け上がり、ホームに入っていた『のぞみ』の自由席に飛び込んだらこれが喫煙車両。

"とほほ"

でもこれからの長旅を考えたら、座れただけでも良しとしよう。

東京駅では上越・長野・東北新幹線のホームも人でいっぱい。私のように台風で予定を狂わされた人達もたくさんいるに違いない。『とき』に乗る前に C 先生に電話を入れ、新潟到着時刻（17 時 21 分）を伝えると、先生も帰りを気遣って下さって「病院まで来てもらうと時間をロスするので、新潟駅まで持って行きます。できれば今日中に（骨髄採取検体を患者さんに）入れた方が良いでしょう」と。嬉しい！！

ホームの売店で押し寿司を昼食用に買い、15 時 12 分発『とき』に乗り込む。この列車は 2 階建てであるが、3 時間前に切符を買ったばかりの私の席は当然 1 階。窓から景色は全く見えず。見えるのは、延々と続くコンクリートの防音壁と空だけ。

"とほほ"

『とき』の車中で、携帯に着信あり。「I と申します。夕方、C 先生は忙しいので

僕が駅まで持って行きます。改札を出た所で、ケースを提げて立っていますから」
本当に、恐縮してしまいます。(某所名物〇〇を買って来てよかったあー)

越後湯沢を過ぎた辺りから空が一変して暗くなり、時折、雨粒が窓ガラスを打つ。

17時21分、予定時刻ぴったりに終着駅新潟に到着。指定された改札を出て、辺りを見渡してもそれらしい人は居ない。地元の女子高生に場所を確かめ、もう一度360度、ぐるーっと見渡すと、おっとー、私が提げているのと同じ青と白のツートンカラーのケースが視野の中に入る。ケースに焦点を合わせ持ち主を見上げると・・・真っ白の半袖Tシャツにこれまた真っ白の短パンをはいた、日に焼けた南国系ハンサムボーイ、ではありませんか。確かこの先生、前回のとき骨髄採取検体を手渡してくれた感じの良い先生だ。しかし今日の先生の格好では、ケースの中身は釣ったばかりの魚、としか思えない。冗談じゃなく、本当に休暇中に呼び出されたかも知れない。

見るからに健康そうなI先生は「本当に大変でしたねー。今からだと、18時30分発に乗れば、先の列車よりも早く東京に着きますから」と親切に教えて下さる。私、「飛行機はまだ飛んでないですか？18時50分に大阪行きの最終便があるんですけど」「うーん、飛んでいたとしても、時間もう間に合わないでしょう」とおっしゃる。I先生にお礼を言い、私は新潟の土を踏むこともなく、みどりの窓口へ。まだ未練たらしく、みどりの窓口で「飛行機、もう飛んでいますか？」ここでは分からないから、と旅行社の窓口か、空港バスのバスターミナルで尋ねるように言われる。しかし焦る私とは裏腹に、旅行社もバスターミナルも言うことは同じ。「飛んでいると思いますけど、詳しいことはこの電話番号で尋ねてください」と、今日一日で何度掛けまくったかわからない航空会社のテレホンサービスの番号を示される。しかし、このテレホンサービス、不親切極まりない代物である。操作を指示する音声に従うと、「ただ今、混み合っております。暫くお待ち下さい」さんざん待って、挙句の果てに「もう一度お掛け直し願います」。

"とほほ"

その間にも、刻々と時間は過ぎていく。飛行機なら伊丹到着20時5分、でも朝の二の舞になるのはもう御免こうむる。なにしろ早く決断を下さないと、「二兎追うものは一兎をも得ず」、となってしまう。ええい、清水の舞台(飛行機)から飛び下りよう。地面を這っていざ大阪へ。

新幹線の切符を買うため再度みどりの窓口へ行くと、なんと長蛇の列。

"とほほ"

「あかーん」、あと 10 分しかない。見回すと、新幹線切符の自動販売機があるではないか。よしよし、と喜んだのも束の間、これがまた無茶苦茶ややこしい。上越と東海道、2 つの新幹線で条件をそれぞれ訊いてくる。「窓際ですか、通路側ですか？」どっちでも良いよ、ととぼすと機械は「うん」と言わない。

"とほほ"

老眼鏡を掛けて必死で画面を覗き込んでいたら、「何を買われますか？」と耳元で声が。振り返ると、松葉杖をついた少し足のご不自由な若い（私より確実に若い、という意味）男性が横に立ってくれている。手慣れた様子からして、駅のボランティアさんなのかなあ。彼のお蔭で無事、切符 3 枚ゲット。これで大阪へ帰れるのだ。自分の機械音痴を棚に上げて「これ、ややこしいですねー」と同意を求めたら、なんと「この機械、作ったのは私です」、「あっ……。それはどうも、どうも、どうもありがとうございます」普段、「何でもかんでも『どうも』でごまかす人が多いなあ」と憂いている私なのに。あー、恥ずかし。

新潟からの『とき』も、滑り込みセーフ状態。さすが、金曜の夜の新幹線。ビジネスマンだらけ。早速、周りでは缶ビールがプシュー、プシュー。おつまみの好い匂いがプーン、プーン。通路を挟んで斜め前の男性がゆで卵を剥き始めた。何を隠そう、わたしはゆで卵には目がない。我ながら情けないぐらい彼の手元、口元を凝視してしまう。しかし、車内販売は無情にもお弁当はおろかゆで卵さえなく、飲み物ばかり。

"とほほ"

20 時 12 分、『とき』 東京着。20 時 20 分、『のぞみ』東京発。さて、この 8 分の間に私は何をしたでしょう。

「お弁当を買いに走る」 ブー

「トイレに駆け込む」 ピンポーン

ただし、極限まで我慢していたのではない。大事な、大事なこのケース、常に自分の手元に置いておくためには、ですねー、列車内のあのトイレ、ケースを提げて入るにはちょっと狭すぎる。畢竟、駅の「ベビー同伴お母さんトイレ」または「身障者トイレ」を借用することになる。用を済まして、ホームに上がったのが発車 2

分前。夕食は車内販売の駅弁。

22時53分、新大阪着。こんな時間なのに、環状線はラッシュ時のように満員。若者の嬌声が耳に堪える。

23時20分、市大病院に辿り着く。病棟で、担当医の小川先生にケースを手渡し、私の今回の業務、全て終了！！！！

でも、もう家に帰る電車も気力もない。中検の今日の当直は女性だし…、採血室の硬いベッドを2つくっつけて仮眠、いや熟睡。翌朝、朝陽に目をしょぼつかせながら朝帰りする。今回の骨髓採取検体運搬の旅って、テレビドラマ金曜サスペンス劇場「朱鷺が運んできたケース」になりませんか？